

町家に生きる身体感覚と空間——太子山町の秦家住宅を訪ねて

吉村晶子 京都大学大学院工学研究科特定研究員

まだ肌寒さの残る3月2日、京町家のひとつ秦家住宅を訪問し、私はいたく感銘を受けた。秦めぐみさんの住みなしよの美しさ、京都人としての挟持、知らなかった歴史や文化、年中行事などの具体の興味深いお話はもちろんのこと、秦さんと秦家の空間との出会いは、私がそのとき抱えていたもやもやとした問題意識に、ひとつの光を差し込んでくれたからだ。訪問記というには不格好かもしれないが、小稿はそのあたりも含めて記したものである

着任以来、「安寧の都市」とは何かと考え続けてきた。

安寧の都市ユニット特定研究員としての研究を開始するにあたり、解明可能な問題に定式化して設定する以前に、ひとりの生活者としてじっくり考えてみたかったことがあった。自分自身が、実感と確信をもって「安寧の都市とはこういうまちであって欲しい！」と心から思えるまちは、はたしてどのようなまちだろうか、ということであった。ごく個人的な生活体験をあれこれ思い起こしながら、何度も自問を繰り返した。

個人的実感から安寧の都市を考える

思考は紆余曲折したが、あるとき、自分にとって最も腑に落ちる「安寧の都市」の定義に思い到った。それは、「そのまちで育てれば、子どもが正しい日本人に育つ」まち、というものであった^{*1}。

実際にはこれは定義といえるほどのものではなく、まだ漠とした単なる個人的な希望、理想に過ぎない^{*2}。しかし、風景学を志して以来、空間の形と生活のかたちの関係を見つめてきた身として、これを単なる思いつきに終わらせたくないという思いに駆られ、さらに可能性を探るべく考え続けてみることにした。すると案外、この思いつきに触発され連想したいくつかのことには、単なる思いつきでは終わらない、安寧の都市のありようをさぐる重要な研究のきっかけが含まれているかもしれない、と思うに到った。

手がかり① 見られる感覚

ひとつは、風景とは「見るもの」だという主体論的発想から離れ、風景に「見られる」ことを考えてみる発想である^{*3}。

例えば、立派な山容の山を眺めるとき、あたかも誰かと対峙しているかのような感覚が生じ、山に人格的なものを感じることがある。そして、その姿が立派で品格のあるものであればあるほど、その人格——何者かに自分が見つめられているような感じがしてくる。同時に、その山と対峙する自分も、



▶写真1 秦家住宅の外観。左隣はマンション

なにか居ずまいを正さねばならぬ気になったりする。あるいは、そのような厳父に対する感覚ではなく、山ふところに棲まい、夕に山に向かって家路を辿る生活をしておれば、山に見つめられる感覚は、慈母が見守ってくれている感覚に近いものになることだろう。

そのように厳父にも慈母にもなりながら、自分を見てくれている誰かがいる、という感覚は、風景が人間に与えてくれる安寧感と勇気の源泉かもしれない^{*4}。

そのような感覚を感じながら生きていける環境で育てれば、子どもは樗のようにしっかりとした芯をもち、折れることなく、雄々しく^{*5}生きていける人に育っていったはくれまいか。

手がかり② 空間の形と人のかたち——立ち居ふるまい、生き方

もうひとつは、空間の形が人の立ち居ふるまいを育てるといふ仮説である。

例えば、アスペルガー症候群の子どもを育てていて心底苦労したことは、いくらなだめようが叱りとばそうが所かまわず走り回るような多動児を、いかに、しかるべき場所では走らず静かにじっとしているよう躰けるかであった。目の前に空間の余地さえあればとにかくその行きつく端まで走らない



▶写真2 秦家のお座敷で皆でお話をうかがう

と気が済まず、決して建物の中でじっとはしてくれない子に日々手こずり悩み続けた私には、それはほとんど不可能な課題にしか思えなかった。けれどあるとき、たまたま旅行先で雨に遭って当初の予定を変更し、とある伝統建築を子連れで訪ねたとき、思いがけず、心から驚くような出来事を経験した。

相変わらず、子どもは建物に上がってもわさわさと落ち着かない。襖や建具を壊したりしないかとひやひやしなながら「だめ、だめよ」と声をかけていたのだが、子どもはふざけまわって止まらない。やはりこんなところに連れてくるのではなかったと思い、後悔の念を新たにしたそのとき、ふと子どもの足もとを見て、この子は生まれてからほとんどを洋室で過ごしてきたことに気づいた。お行儀が悪すぎる。

そこで、「あのね、畳のへりはね、踏まないのがルールなのよ」と、さも大事な内緒話のように、これから一緒にやるゲームのルールを教えるように、子どもに囁いてみた。すると急に、あんなに暴れまわっていた子どもが、それだけで突然おとなしくなり、神妙な顔でしずしずと歩いているではないか。彼はどうやら、母と一緒に遊んでくれる楽しい新しいゲームが始まったのだと思っただろう。夢中になって、畳のへりを踏むまいと真剣になっている。ああ。こんな奇跡のような光景を見られるとは思わなんだ。叱ったり怒鳴ったりしなくても、力任せに腕をつかんで押さえ込まなくても、畳のへりに気をつけさせるだけで、はたから見れば単なる「とても行儀のいいおとなしい子」に見える子どもに、一瞬で変身したのだ！

秦家を訪ねる

このようなことを思い出しながら、どのようなまちで育てれば、子どもが正しい日本人に育つだろうかと考え続けていた。他人の子であっても我が子のごとく叱ってくれる隣人の居まち^{*6}。儀礼的無関心とは無縁に子どもが育つまち^{*7}。あれこれ思い付いてはふつつつといろんなことを考えた^{*8}。

そんなある日、安寧の都市ユニットのスタッフ8名で、京都市太子山町の京町家のひとつ、秦家住宅を訪ねる機会を得た [写真1、2]。「そのまちで育てれば、子どもが正しい日本人

に育つ(と思える)まち」をいかに研究していくかを延々と考えていた私にとって、そこに暮らす秦めぐみさんのお話は、新しい風を吹き込んでくれる興味深いものであった。

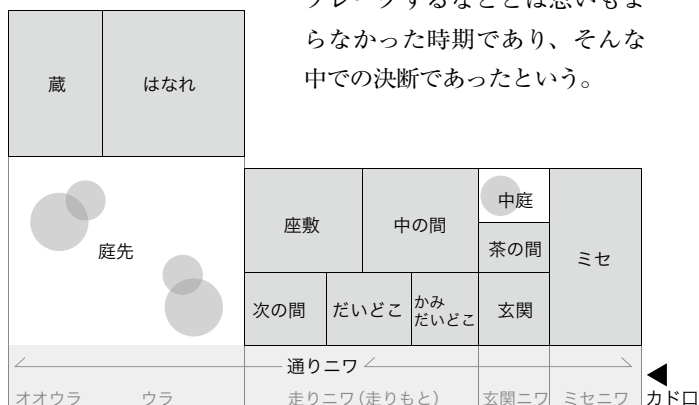
そのお話には、生活のかたちや人のところが空間の形とどれほど結びついているかについての興味深い示唆や、人が「生きていく」ことについての深く鋭い洞察が含まれていた。以下、秦さんに教えていただいた内容を、当日のメモをもとに補足しつつ辿ってみる。

文化財としての秦家住宅

京都市下京区油小路仏光寺下の太子山町(油小路通西側)の秦家は、太子山町に残る文書により、340年間この場所に住み続けていることが確認されているお宅である。江戸時代から奇應丸^{きおうがん}の製造・販売を家業とし、アジアから輸入した原料を粉末化して丸薬に加工・製造、販売してきたが、明治の頃には原料の輸入が困難になったという。

現在の住宅は、江戸後期の蛤御門の変の大火で一度消失したのち明治2年に上棟・再築されたものである [写真1]。「表屋造り」と呼ばれる形式で、店舗一玄関棟一住居棟という構成で2つの庭が特徴である [図1、写真3]。敷地全体として下京の伝統的商家のおもかげをよく伝える住宅として貴重であるとされ、店舗と玄関棟の部分が京都市有形文化財に登録されたのは昭和58年である^{*9}。このとき同時に登録されたのは、同じく中京区にあってかつて呉服商であった野口家など3軒で、まちなかの商家としては最初の登録であったという。

京町家を取り巻く情勢からみると、その頃は町家の取り壊しが進行しつつある時期であり、1995年^{*10}には隣の呉服商家を売り、後にマンションになった。しかし、秦家は表屋が文化財指定されていたため、この時期に同じ運命を辿ることなく残った。そして後に京町家ネットを立ち上げる人々との出会いなどがあり、諸々を経て公開を決定したそうである。その頃は、今のように京町家の保存再生が盛んになり町家がブレイクするなどとは思ってもよらなかった時期であり、そんな中での決断であったという。



▶図1 秦家住宅の構成(秦家住宅ホームページ掲載図をもとに作図)

お町内と学区 ——ヒューマンスケールのコミュニティ

秦さんは、コミュニティのなりたちから話をしてくださった。

まず、京都のコミュニティの最小単位は「お町内」である。太子山町であれば、南北の油小路通に沿って東西の仏光寺通から高辻通までの延長120mほどの道の両側がその範囲である。北の町内は「かみんちよ」、南は「しもんちよ」、裏は「うらんちよ」、横は「よこちよう」と呼ぶのだという。

その次の単位は「学区」である。学区というのは、他地方では一般名詞であったりするが、京都でのそれは、明治時代にそのお町内で構成した住民自治の単位に由来する。27ほどの町をまとめて町組を組織し、それに通し番号を与えたことからこれを番組と呼び、この番組ごとに住民がお金を出しあって建てた番組小学校^{*11}を核とする一段階上のコミュニティの単位であり明確な性格を持つ。

秦家のある太子山町は、そういう学区のひとつ格致学区に属する。格致学区の範囲は、四条から松原、西は堀川、東は西洞院までで、この地域の人々が建てた格致小学校は、その名前にもこだわり^{*12}、またとても雰囲気のある「学校らしい学校」であったと秦さんは言う。その様子から、コミュニティの人たちが誇りに思う存在であったことが十二分に受け取れた。

子どもはまずお町内にデビューし、小学校で学区にデビューする。すべてのことが町内で済ませられるヒューマンスケールのまちだと、秦さんはおっしゃる。曰く、「1学区にはひとつの風呂屋と畳屋があり、豆腐屋や菓子屋、駄菓子屋は数軒ずつ。高度成長期までは歩いて数分のところに町医者が何軒もあったもんです」。

秦さんは、「戦前までの京都は人々の長年の知恵を重ね合わせたひとつのシステムで、思い起こせば起こすほど、そのシステムがどれだけ機能していたかを思い知らされます」とおっしゃったのが印象的であった。

それぞれの家は間口5間、奥行き15間。そのように定められた規格の家々がぐっと寄り添いながら建ち、そこで人々は、コミュニケーションをとりながら、また同時に適度な距離をとりながら、生活していたのだという。

秦さん自身も、京都の中ならどこでも自転車で行かれるとこのことで、「30分もあつたらたいいどこでも行けますし」と笑顔でおっしゃる。

こころとかたち ——商人の精神と京町家の形

私はまったく知らなかったが、京都の商家が基本に据える教えに石田梅岩の石門心学があったと教えていただいた。その倫理観は、一切の無駄をはぶき、うまく商売をまわすこと

であり、梅岩が開いた大きな塾には大人も子どもも通いつめたという。梅岩が説いたのは教育の必要性、勤勉、儉約、孝行の大切さであり、商人が利益を追求することの正当性を強調すると同時に、私的な益は公的なものに還元してこそ商売がまわるのだと人々を戒めたという。

秦さんはこのような石門心学の精神が形となったのが京町家なのだのお考えであった。たとえば、商家では一般に階下の窓には格子をはめ、表屋の屋根高は低い。それは、商人は人を見下ろしたりなどしないことを反映していたのだ、と。しかし時代が下り、建物が総二階になると窓を開けるようになり、格子も石張りになっていった。建物の形と人の世の流れの変化は常に同じように同調しながら動いている^{*13}。秦さんはそういう感覚をおもちであった。

また、オモテは店、その奥に住む、というのがここでの暮らしの形である。そのことをふまえる秦さんたちの感覚では、「洗濯物を道に干すようなことはあり得ない」のだという。さらに、これは都市として洗練された形ではないかと秦さんはおっしゃる。しかし、まちに徐々に郊外型の住宅が入ってくると、そういう家では日の当たる2階に洗濯物を干し、高層マンションのベランダは洗濯物で満艦飾である。

「洗濯物を2階に干してはる」と京都弁でおっしゃるのを、私



▶写真3 秦家の奥庭。お座敷前の縁側より

は心の中で、京都弁の敬語表現には自他の区別の意識が含まれることを思い出しながら聞いていたが、秦さんはさらにはっきりと、「なんと見識のない風景になったことか」と嘆かれる。すなわち、京都の人には、一人あるいは個は全体の一部であるとの意識がある。「家の中(での住みなしよう)には個性があっても、外から見るとまち並みの一部だ」という意識を、京都の人であればもっていたもんです」とおっしゃる。

そのうえで、いまマンションに暮らす子どもたちは、親と一緒にバスで往復生活をしていて、隣人だという感覚がないという。「容れ物としての家だけつくってどうなるの」と秦さんは嘆きつつも、「しもた! と思たら、元(のまち)に戻たらええのとちゃいますか」。やり直せると、あくまで未来に希望をもっておられる。秦さんのような方がいらっしゃる限り、希望は捨てないでもいいのではないかと、思わせる説得力を、私も、確かに感じたのであった。

身体で感じること ——じかに環境にふれて育てる感受性

秦さんたちは、満艦飾の洗濯物を見ると「あらあら」と思う。けれども、「あらあら」という感覚のあるうちはまだよくて、それが当たり前になりつつあるのではないかと、ということにさらに言及されたのにはハッとした。曰く、「まちで知らない人とすれ違って平気になった。そうして、気に留めなくなったこと自体がむしろ怖い」のだと。

秦さんは、ご自分の実感を込めながら強くおっしゃる。「子どもたちは、身体で感じる事が大切」。曰く、気色悪いものは「きしょくわるい」と思う感受性が必要だと。「でも、今は理屈が優先的に走って行く世の中。もっと実のあることが体験できる場を大人が考えなくてはいけないのではないのでしょうか」と。



▶写真4 店の間から。格子越しに外がとてよく見える

秦さんが子どものころに通った小学校で思い出すのは瓦屋根、コの字形の校舎、中庭、木の階段、油のにおい。夏は暑くてノートの下敷きであおぎながら過ごしたこと。でも今の子どもたちは空調完備の均質化された快適環境で育つ。秦さんは、「子どもたちの心が折れやすくなったのではないのでしょうか」と感じておられる。多少、つらく厳しく不便な環境でも、じかに環境にふれることが大事なのではないかとおっしゃる。「冬野菜でも甘うなりますし」と、鮮やかに喩えながら。

見られる感覚——格子の中と外

「店の間」に案内していただいて改めて気づくのは、格子というのは中から外がよく見えるものだということ【写真4】。外の音も筒抜けのように聞こえる。秦さんは、「だから、自分が外を歩くときにも常に見られている」という意識が身につくのだとおっしゃる。夜、タクシーに乗って帰ってきても、秦さんは決して家の前までは乗り付けず、少し手前で降りて歩いて帰るという。

余談ながら、秦家の向かいにデイケアセンターがあり、ここに来る人たちは、どこへお出かけかと思うほどの盛装で通ってくるそうだ。それを聞いた教員のひとりが、大阪ではそのようなことはないと言い、その場の雑談は、しばし、外へ出かけるときの意識とそれに応じた服装の話になった。それを聞きながら、このようなことにも、見られる意識が醸成される空間に暮らすことに通じるところがあるのではないかと感じた。

空間の性格と使い分け——建物とともに 継承されてきた文化としての暮らしの形

玄関と奥との間のふすまは開け放すことが無いものだそうだ。また、走り庭の奥へ向かう入口ののれん(玄関前にかかるのれん。内のれんと呼ばれる)は結界であり【写真5】、他人がその奥に勝手に入ることはあり得ないのだそうだ。ただし、子どもについてはフリーパスの扱いであり、秦さんも、子どもの頃は走り庭をフリーパスで入って行って大裏(オオウラ。通りニワの突き当たり)で遊んだ。それでも、玄関に上がることは決して無かったという。私はそれを聞いて、そこが大人の空間であることが子どもにもはっきり分かるほどに空間の性格が明確なのが京町家の商家というものなのだ改めて思い、同時に、不調法な自分のこと、もしかして無意識にお玄関やお座敷で無作法なふるまいをしでかしたりしていなかったかと心配になり、お邪魔してからのが身を振り返り始めた。お玄関やお座敷がどういう場なのかをよくわきまえずに上がってしまった気がしたからだ。

空間の使い分けについてさらにお尋ねすると、呉服屋さんの茶室を例にお話が続いた。茶室のある呉服屋さんがわりあ

い多くあるそうだが、呉服屋さんにとってお座敷はサロンであり、お客のために厳選した反物の幅をそこで見てもらったあと、「奥でお茶でも」というように茶室を使うのだそうだ。茶の湯はみなさんがたしなむから、商用にどこまで奥を使うかはあるじの考え方だろうとのことであった。

秦さんは、生き方のスタイルと建物とはどこかで結びついていて、その形は常に変化してきたのだと。「神棚があるからこそ、その形をつくらなければならないと考える自分がある」、「店の間の大黒さんが信仰の対象だとはいいきれないけれど、家の中に神さんがいることの大切さを強く感じる」ということを、柔らかい京都弁でおっしゃる。「建物には文化財としての位置づけがあるけれど、その中にあるのは建物とともに継承されてきた文化であり、暮らしの形そのもの」と話される。

神棚のことひとつをとっても、実際にはなかなかできないことであろうし、ましてや、暮らしの形にまでなると、やってみないと本当にはわからないことばかりだろう。だから、私には、わかったとまではとても言えないのだが、しかし秦さんが、建物よりむしろ暮らしの形こそが文化であるとおっしゃること、そしてこのことを実感として深く感じて暮らしておられるのであろうことは、私のような者にもよくよく伝わるものがあつた。

■ 年中行事 ——生きていることを確かめる節目

年中行事について秦さんに尋ねる。まずお正月、そして節分、墓参り、ひな祭り。6月下旬には建具替えをして、冬のしつらえを夏のしつらえに変え、そして祇園祭、お盆、お墓参りとあつて、9月終わりにはまた建具替え。12月にはお正月支度が始まり、正月にむけて漬物、白みそを仕込む。年末には6カ所の神さんにしめ縄のお飾り。「建物があつて神さんが居はつたらやらざるを得ません」との答えが返つてきた。

それぞれの年中行事は、自分の中で何かを確かめる時期なのだお秦さんはおっしゃる。曰く、生きていくサイクルがあり、瞬間瞬間に節目がある。生きていくことを確かめる節目がある。「でも、今の時代はみんなが好き勝手に時間を使つてますでしょう。私には、自分からバランスをくずしているようにみえます。そうならないための先人の知恵が、節だったので……」お秦さんは感じている。

節の原点にあるのは、食べることだと秦さんは指摘する。食べることは、生きていくうえでの原点なのだ。食べるものにもサイクルがあるのだ。デザートには夏野菜も冬野菜も一緒に並んでいるけれど、自分たちの体と生活のバランスを守るには、「サイクルをおごなりにしない生活がいい」と。そして「食べることに敏感になると、おのずと季節に敏感になります、季節の香りがするもんです」と。



▶写真5 内のれんは結界

食べ物から台所の話になると、秦さんは、「町家ではダイドコが寒いでしょうとよく言われるけれど、実は台所まわりというのは決してただ寒い空間では無かつたんですよ」とおっしゃる^{*14}。もちつきのときの白い湯気。温かいものが食べたいと思つて食事を作り始める、その過程全体で感じる「冬」。そのような感覚を大切にされる秦さんのお話を聞きながら、私も、忘れかけていた子どもの頃に感じた寒さや暖かさというものを肌感覚として思い出した。そういうものを忘れてしまわずに、そのような感性をもつて生きていく。それは、素朴でありながらもなんと彩りのある美しい暮らしぶりだろうか。私はあこがれに近い感概を抱きながら、そのお話を聞いていた。

いや、本当のところ、忘れてしまうほうがおかしいこと、普通ではないことかもしれない。言葉に変換された後になつても、秦さんの話す季節の感覚はとても具体で、鮮やかで、先鋭で、聞く側の身にも、確かに感じたことのある身体感覚をはっきりと呼び起こしてくれるものだった。自分も確かに感じたことのある、肌でじかに感じてきた寒さや暖かさの感覚を辿りながら、それなのに今や、自分にとっての冬、春が、なんと観念的なものになっていたのかと思ひ知つた。「春に蕨を感じ、蕨に春を感じる」感覚は私にも確かにあつたはずなのに、今はそのことをすっかり忘れ、「春になつた、蕨が芽を出した」とだけ思うように成り果てたのではないかと^{*15}。

現代社会のなかで ——持続と共存のために

秦さんのところには、小学生の子どもたちも見学に来る。秦さんには、ただ教育の場を提供するのではなく、この家に関わることで、このような場・空間が存続できるという共存の意識を子どもたちにもってもらえないものかという思いがある。だから、50円でもいいからと、小学校の先生に見学料を求めたことがあったそうだ。「どうして、ここにこの家があるか」を子どもたちに伝えるための気持ちの問題としてだった。しかし、それは実現できなかった。

秦さんは、うるさく保存とか再生とか言わないで、建物の本来あるべき姿にそった使い方、どう使えばその建物が喜ぶのかを考えることが大事だという。それがわかるには時間がかかるが、こうして実際に来て使うことが大切だと。私も、秦さんのお宅にお邪魔し、空間と心のあり方、生き方の一端を拝見し、まったくそのとおりだと、深い共感を覚えた。

訪問を終えて

今の世の中は、多様な価値観に溢れている。確かに、異質な価値観をも柔軟に受け入れることは、現代において社会生活を営むうえで重要なことであろう。しかし、まだ自我も定まらない時期の小さな子どもが育つうえで、そのような子どもの育つスケールの地域とそのコミュニティの中で共有されたひとつの価値観の存在が必要であろうことは、かねてから思っていたことではあった。しかし今回、秦さんのお話をうかがっているうちに、それは価値観だけではなく、空間の形にも表れることであり、逆に空間の形がいかんにか人の生き方そのものに知恵や彩りを与え、それを美しくするものなのかということに、もっと思いを致さなければならないと強く感じた。今はまだ、いくぶん情緒的な感懐に過ぎないこの思いを抱きつつ、何とかこの一端を示すような研究をしてみたいと強く思った。

今、この場所にあるのは、家、町内、学区という入れ子になった重層的な空間であり、人々の生き方、心であり、文化、暮らしぶりである。そこには、格子のことから気づかされたような、場の光に照らされた自分があり、自我と他我の「うつし」の関係がある。そのような一つひとつの風景学的現象を、丹念に掘り起こすような研究がしてみたい。そして、そこからコミュニティの身体論を研究し、これからの安寧の都市を考えていきたい。このような意を強くさせてくれた秦家訪問であった。もの知らずの私たちに丁寧に教えてくださった秦さんに、最大の謝意をお伝えしたい。

- * 1 「正しい日本人」といっても思想的な含意はなく、ただひたすら、日本の未来になう子どもたちには真人間に育てて欲しい、と思うだけである。
- * 2 研究としては、ユニット内での議論が重ねられ、その定義は、本誌の「安寧の都市論」に示されたとおりにある (pp. 30-31)。
- * 3 中村良夫氏はこれを「無相の自己」すなわち「場所からの光に照らし出される自分」ととらえた。「ふつ、人間が風景を眺める、というのですが、場という考えをいれると、人間が風景に見詰められていることになります」(本誌 p. 7)。
- * 4 南方熊楠も、神社の神韻たる趣の中に何事のおわしますかを知らずとも感化されるところであろう、と言っていたことが思い出される。
- * 5 「何にも増して、この大災害を生き抜き、被災者としての自らを励ましつつ、これからの日々を生きようとしている人々の雄々しさに深く胸を打たれています」(今上天皇陛下：東日本大震災後のビデオメッセージ)、「しきしまの大和心のをくしさはことある時ぞあらはれにける」(明治天皇御製)、「ふりつちるみ雪にたへていろかへぬ松ぞをくしき人もかくあれ」(昭和天皇御製)。
- * 6 自分の子どもだけでなくよその子ども同じ地域の子も、コミュニティの宝だと思っ、同じように注意し、見守ってくれる隣人がいることは、子育てするうえでばかり知れず心強いことである。夫の勤める古い会社の社宅で、そういう隣人に恵まれ、日々感謝しつつそう感じている。もちろんこれは、隣人と価値観が似通っている場合に限られた話ではある。あるいは、スタティックな価値観の話でなく、地域の子どもを育てる共同作業を一緒にやるという、戦友のような信頼感を確かめ合う動的な過程そのものかもしれない。
- * 7 例えば、新幹線で2時間以上も肘が触れ合う距離に居ても、隣席の人と言葉を交わすことはふつう無いことであろう。今の時代はそのような際に無関心な態度で居たほうが、プライバシーの侵害にもならずマナーに則っているとされる。小学校では「人に会ったら挨拶をしましょう」と教えられたはずなのに、一方で、無視するほうが礼儀にかなう空間がごく身近なそこにあるのだ。儀礼的無関心については空間論的にも興味深い面があるのでいづれ稿を改めて議論したい。
- * 8 例えば、そもそも「このまちで育てれば、子どもが〜に育つまち」という定義のしかたは日本語としてまことにまどろっこしい言い方だ。だが、こうとしか言いようがない。仮に「子どもが正しい日本人に育つまち」などとしてしまうと、それに研究として取り組むには何らかの「正しい日本人」の指標を設定し、その指標を継続的に子どもたちを計って評価しなくてはならなくなる。そんな方向には興味がない。そうではなく、「ああ、このまちで育てたら、子どもが正しく育ってくれるだろう」とか、「ああ、このまちなら、間違いない」と思わせてくれるような何らかの性質がそのまちに備わっているなどということがあるのではないか。その意味では、「このまちで育てれば、子どもが〜に育つまち」という方式は、そもそも子どもが現にそのまちにいかどうかすら必要条件にはならないという点で自由度があていではないか。さらにいえば、そのようなまち——安寧の都市がもし存在した場合、もたらされる安寧感の最大の受益者は、子ども自身でなくむしろ母親のほうだろう。しかし仮にそうだとすると、主体論的、個人主義的に「わたし」が快適さを感じるかどうかを問題とするのではなく、子どもを含めた他者にとってのよりよい未来を担保する(と思える)条件、さらに、他者をも含めたコミュニティ全体の安寧を信じることが出来る条件を問題とすることは意義のないことでもあるまい。ともかく、これを研究していくためには、従来型の「わたし」の身体を超えたコミュニティの身体なるものを想定し、個人の身体論を拡張してコミュニティの身体論へと展開する必要がある、この問題に関し、抽象論を超えて具体的に迫るには新たな方法論の確立が必要ではないか。このようなことをぐるぐると考え続けた。
- * 9 のち平成20年に主屋居住部と土蔵などが追加登録されている。
- * 10 秦さんが、文化財登録を受けた年を「昭和58年」、お隣が家を売ってしまった年を西暦で「1995年」とおっしゃったことに、私は何かを感じざるを得なかったが、もしかしらたらまたまそう言われただけかもしれない。
- * 11 住民の中でもとくに裕福な商家などがより多くのお金を出して建てたといい、他の学区と競い合うようにして、我が学区の小学校を立派にしようという気風があったらしい。
- * 12 「格致」の名は「格物致知(かくぶつちち)」という『大学』の中の言葉からとっているとのこと。物事の道理を極め、自らの知識を完成するという意味。
- * 13 なお、秦さんは、この石門心学的な価値観は、明治から変わっていったのではないかとおっしゃっていた。秦さんのおいさまは、西洋がぶれなところがあったが、それはおそらく、西洋文化にあこがれ、自分の身近に置きたいと思ったからではないか。東京に首都が移って、京都がとりのこされないためには新しくならなくてはという思いがあったのではないか。そのようなこともお話しされていた。
- * 14 台所だけでなく、町家そのものが、実は、きちんと建物の修繕をしていけば寒くないとも、秦さんはおっしゃっていた。老朽化しているから冬に寒いのだが、建具がびしょとしていたら寒くないという。
- * 15 唐木順三『日本人の心の歴史(上)』p. 18、ちくま学芸文庫、1993